

喜劇は朝鮮を映す

金正浩

私が主宰する在日朝鮮人劇団「アランサムセ」が三年前、「在日同胞社会を巡る諸問題を独自の視点で切り取り提示する」という劇団理念を「曲げ」て、朝鮮民主主義人民共和国(以下朝鮮^①)の戯曲を本邦初演した理由は、その数カ月前の某大新聞の名物コラムにある。

「平壤での取材中。恋仲らしい男女が口論、女性は泣いていた。意外な人間味にほっとしたが、一瞬これが噂の熱演かと身構えたものだ」。「意外な人間味」、「噂の熱演」って何だ？

「北」の人間は恋愛しないと思いい込んでこの「知識人」に、朝鮮には恋も笑いも涙もあるという当たり前のことを教えてやらねばと、「現代朝鮮演劇シリーズvol.1」と銘打った短編コメディ三本(「バスケット選手」、「熱き心」、「澄んだ水」)を上演したわけだ。それにしても得々と「北」を論じる彼らの何割、否、何厘が朝鮮文化

に触れた、否、かすったことがあるのだろうか？ 政治であれ経済であれ他国を語るのにその国の文学や映画、音楽について全くの無知ということはあるはずだろうに、「北」に対してだけは何故かそれが許されるというこの状況を訝りながら、朝鮮喜劇の断片を紹介させていたどころ。

●素材は経済

社会主義国朝鮮の文芸は「革命と建設の武器」として「政策遂行に寄与する」ことをその使命に戴いており、娯楽まじりや商業という概念が前面に押し出されることはない。と書くとは先般の「固定観念」を助長させてしまいうだが、押さえておきたいのは「政策遂行に寄与する」より良い作品の重要なファクターとして「笑い」の役割が大きいということと、その「笑い」は文学や映画と比べてナマものと呼ばれる演劇の分野で圧倒的な比

重を占めているということである。朝鮮の代表的月刊文芸誌に「朝鮮文学」、「青年文学」、「児童文学」、「朝鮮芸術」、「朝鮮映画」があり、戯曲は主に「朝鮮芸術」に掲載され、また数年に一度の割合で戯曲集が出版される。政策と前述したが、これらの戯曲にあたって見るとあらゆる年代のほとんどの作品がその時代その時代の喫緊の課題ひとつを素材にしていることに気がかされる。

ほぼひとつの課題、経済である。この二〇年、さらに溯って数えても七〇八割の戯曲の舞台が工場、建設現場なのだ。(残りの三分の二が農場といったところか)

その時々々の経済的課題、例えば電力問題、地方の中小規模発電所の建設を巡る物語や食糧問題、穀物増産のための開墾事業、都市部の大規模建設事業などの舞台化が近年は目につく。ただし経済問題を「素材」と記



© 2012 Korea Media Corp.

したことに注意されたい。決してそれ自体がテーマではないのだ。直面し克服しなければならぬ経済的課題を抱えた現場を舞台に、課題を克服すべく闘う主人公とそれを阻む旧弊、旧思想との葛藤―これこそが朝鮮演劇の王道、基本構造なのである。ワンパターンと思われるかも知れないが、これに必ずと言っていいほど笑いと恋愛がからみ、時々々の経済的課題の多様さと相まって変幻自在のパリエーションを生み出すのだ。

●喜劇の二大パターン

朝鮮喜劇における笑いの構造、つまり「何で笑わせるか」は大きく二つに分類できる。これこそが特に知っていたいただきたい「笑いは万国共通」、朝鮮に生きる人々の何ら特殊でない普通の生活と感情である。

ひとつは「人まちがいと嘘」のパターン。シェイクスピアから三



© 2012 Korea Media Corp.

谷幸喜まで、〇〇を▲と誤解したことよって起こるドタバタと、難局を切り抜けるためについたひとつの嘘によつて延々と嘘を重ねなくてはならなくなるという「喜劇の王道」が朝鮮でも基本である。

一九九〇年代最大の評価・ヒット作「一心一身」は、平壤の記念碑建設に地方から志願して来た（大規模建設現場や繁忙期の農村への志願勤労者は実際多い）老人男女が帰らせようとする本部の命令をかわすため夫婦と偽ったことから起こる、互いの連れ合いや孫を巻き込んだの誤解合戦とそこから生じる言葉のズレで笑わせる。偽夫婦であることを見破った現場監督が正体を暴こうと画策すればするほど、幹部に叱責され窮地に追い込まれるという趣向が何とも面白い。

もうひとつのパターンは「笑わせるキャラクタール」。これはモリエールの喜劇に近いと言えようか。この

性格造形は前述の否定的人物―旧弊、旧思想の体現者に集約され、そのほとんどが行政や職場の幹部という設定である。つまり「風刺と批判」が朝鮮喜劇の大きな特徴なのだが、朝鮮社会が問題視する旧弊、旧思想とはいかなるものか。

この二年間、圧倒的な評価と支持を受けてロングラン公演が行われた「山びこ」（写真）についての労働新聞論評（二〇一〇年四月二八日付）の一節、「時代の要求に呼応し、より高い理想と抱負を掲げ実践しなければ井の中の蛙、拳句は時代の流れを堰き止める障害物になる」。

山間僻地を舞台に、新しく農地を開墾しようとの理想に燃える青年と「今まで充分頑張つて来た」と自負する旧世代幹部との葛藤が描かれるのだが、青年が「自己満足病」と名付けた幹部たちの設定が面白い。諸々の悪条件を克服し村の生活水準をそれなりに高めて来たことに満足している彼らには、現状を批判する青年が「低劣な不満分子」にしか見えなかったり、揶揄を賞賛に受け取ったり、青年の真意を探ろうと若い女を接近させたり、「不満とは立場により表裏一体」という状況設定が興味深い。青年と幹部が家の内と外で同時に全く異なる「村の未来図」をほぼ同じ文言で語る場面はテー

マ、笑いの両面で秀逸である。実はこの作品、一九六一年に初演されたもののリメイクで、先の労働新聞は当時の経済復興のシンボルである「千里馬運動」の精神を今日の「軽工業と農業が人民生活向上の主戦線」という政策に継承、具現したものと評している。

この「山びこ」を含め近年の演劇の主人公の多くが「除隊軍人」であることも重要なポイントであろう。日本で直訳される「先軍政治」には軍事独裁的なニュアンスが感じられるのだが、軍として除隊軍人が经济建设の核を担い困難を果敢に克服するその気風を国民が学ぼうというのが朝鮮で謳われる「先軍」の戦略である。経済的課題を克服する主人公が科学者や技術者ではなく（その場合ももちろんあるが）除隊軍人であるということが「先軍」戦略を具現する近年朝鮮演劇の最大の特徴であると言える。

除隊軍人が己を信じ他力を頼まず無から有を創造し「抵抗勢力」旧弊、旧思想」を見事説得し課題を遂行する―その過程が「ご都合主義」かそうでないか、つまりリアリティの獲得度数は笑いの量と質にけっこう比例していると思えるのだが、いずれきちんと研究したいと考えるテーマではある。最後に環境保護問題を喜劇仕立

てで扱った「澄んだ水」（二〇〇六）に一言触れたい。平壤を流れる大同江に工場の廃水が流入、自工場のものとは思えない工場長の必死の「犯人探し」を笑いながら、「自然に偶然はあっても環境保護に偶然はあつてはならない」、「言葉の誤りは訂正できても水が濁れば元には戻せない」等の警句に、原発事故と再稼動に揺れる今を考えずにはいられない。

演劇は世界を映す鏡、という。私は喜劇こそ今日の朝鮮を映す鏡だと信じている。経済問題に代表される厳しい現実と課題、克服への志と理想、それらを繋ぐ笑いや恋愛などの生活と感情を鮮やかに、ほのぼのと、しみじみと差し出してくれる朝鮮の作品を出来る限り紹介して行きたい。翻訳でも上演でも。

「現代朝鮮シリーズ vol.1」と銘打ったからには2、3と続けたいと企んでいる。

（キム ジョンホ／朝鮮大学校教授）

《注》

(1)大韓民国を略して韓国と呼ぶのに対し、略して朝鮮でいいものをわざわざ「北」の一字を付け足すこの国の国是には「絶対国」とは認めない」の執念を感じる。